

いの流水俳壇

「当季雑詠」

松尾 満津於選

穴まどひ母の役目のまだ有りて

竹崎 光子

(評)蛇は秋の彼岸の頃に穴に入り、ながい冬の蟄居を始めるという、彼岸を過ぎて尚お穴に入らないものを、穴惑いというがこの句は住人の少い山里にあつて、家族の生活を守り続けている母親の存在の大きさを見せた句である。季節の推移にジット眼を止めながら次の仕事の段取を考える、山村農家の主婦を意識した句。

木洩日や選ぶ近道秋立てり

井上 郁子

(評)木洩日は木の茂みの中から洩れ差しってくる光のことである。暑気のまだおとろえを見せぬ午後ひととき、近道を通つて歩く、微風が頭上を過ぎる、その

わずかな冷氣にやつと秋だなアと気付かされる。

秋茄子の畑に亡妻の靴の跡

間 浩太

(評)この句に接して改めて夫婦の絆の永遠なることを想起する。他界した妻の靴跡が残る秋茄子畑、独りになったさびしさが、その存在の大きかったことへの自覚につながる。かれこれ他人が推測で語ることは失礼で迷惑なことであろうが、弱いようでも、まさかの場合の妻の度胸は強い。男は名声を重んじ、女性は夫に生命をかける。

佇めば稲穂の起伏風の形

友草 水月

(評)澄明な安心が窺える句。吐息をホッとつき、目を細め、しばらく佇む、あたりの風光に歩んで来た人生をふり返る。畦草に腰をおろして疲れを癒す、風に靡く一穂一穂が、うなづくように風の形に、うねりを生ずる、平穩無事な一瞬のやすらぎが見える。

葉から葉へ音なき風や藤袴 伊藤 たみ

万象を透明にして秋の風 大川 節弥

無造作に秋草の束籠に活け 津田 久美

指切りはいつも夕暮紅芙蓉 岡本とも子

虫時雨文字に乱れや農日誌 川村 博子

唐黍の窓に葉ずれる同窓会 筒井 正子

コスモスのやさしき強き風原 刈谷 志津

ゆらゆらと色なき風のおみなへし 弘瀬うき子

ひびき入る虫の鳴き声裏座敷 森岡 照月

青春の淡き思い出ソーダ水 筒井 一平

同姓の多き漁村や曼珠沙華 植田 紀子

僧の鐘くわんくわんと秋の風 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

秋の風 そとそよ風が うたつてる

川内小6年 西村美早姫

ぼくので こんがり焼けて 肉のよう

川内小6年 浜田 樹

事故がない そんな毎日 うれしいな

川内小6年 安地 勝也

夏休み どのに行かな もどって来い

川内小5年 山本 翔

せいの声 夏休みとともに とんでた

川内小5年 坂本 豊光

秋始まる 入道雲が 消えていく

川内小5年 矢野 紘基

夏休み 日焼けしている 黒いはだ

川内小5年 西村麻妃呂

夏はい おまわりあるし 海もい

伊野小3年 鎮田 葵

※「ことも川柳」は町内全小学校の児童のみなさんを対象に募集しています。たくさんの方の皆さんの応募をお待ちしています。(応募は学校を通じてお願いします。)